決しておごらない、感謝する。

1

2

3

4

父にインターホンを押させたらダメ

私はいま環境プラント施設に特化した機器の据付や配管、電気工事などを請け負う万水電機設備工業株式会社の責任者として、20名ほどのスタッフを率いて会社経営をしています。環境プラント施設とは、上下水処理・ごみ焼却・し尿処理・浄水場・産廃処理施設など、こうしたさまざまな現場において工事をトータルで施工管理をするのが弊社の役割です。会社のはじまりは昭和43年ですので今期54期目にはいりました。創業は私の父です。電機工事会社につとめていた父が独立してスタートさせました。最初は私の両親と職人2人だけ、業務内容も電機工事のみでした。電機工事というのはすべての工程のなかでいちばん最後、ほかの工程が遅れてしまえばすべての帳尻をあわせなくてはいけない役割です。そこで父が設備工事もいっしょにやってしまおうと考えたのです。創業当初は万水電気工業所だったのですが、万水設備工業所を併設し、1970年に万水電機設備工業株式会社を設立しました。

なぜ万水なのか？は、父が創業にあたり色々と運勢をみてもらうなかで水に守られている運勢だとわかり、水がまんまんと湧き出てくるように繁盛する会社を作りたいという思いで万水とつけました。ただ「まんすい」と呼ぶのは響きがイマイチなので「ばんすい」また英語表記はＢａｎｓｕｉではなくＶａｎｓｕｉ、これはＶＩＣＴＯＲＹのＶからとりました。会社ロゴの電機設備も並列の二段表記としています。もともとは電機業からスタートし設備業が加わったのですが、どちらが先ではなくあくまでの並列の事業であるという想いをロゴにも込めているのです。なぜその会社名にしたのか？そこに込められた想いをきちんと伝えつづけることは会社を引き継ぐものの責任だとかんがえています。

とにかく怖くて、礼儀作法にはものすごく厳しい父でした。私は姉二人、弟一人の四人兄弟。帰ってきたときにインターホンを押させたらダメ、どういうことかというと父がかえってくる車の音が聞こえたら、子どもたち全員で玄関からでて父をむかえるのが清水家の決まりだったのです。出ていくのが遅れて父にインターホンを鳴らさせてしまうとものすごく機嫌がわるくなるのです。だから毎日必死でした。母親は父親が帰ってくるまではかならず待っていて、寝ていたとしてもかならず起きて父を出迎えていました。いろいろなことに厳しい父でしたが間違ったことは絶対に言いませんでした。しかも学生時代はボクシング部主将、下手に反抗しようものならどうなるかわからない。だから清水家には「反抗期」という考えかたは存在しませんでしたね（笑）。

父の意向は、「5年以内に戻ってこい」

幼いころのヒーローといえば阪神タイガース田淵幸一さん。田淵さんにあこがれて小学生のときからはじめたのが野球です。背番号はもちろん22。ポジションももちろんキャッチャーだったのですが、背がどんどん伸びて卒業するときには170センチになっていました。背が高いだけでピッチャーに転向することになったのですが、中学時代はエース・四番・キャプテン。私の人生の最大のモテ期でした（笑）。ただその中学校自体はさほどつよくなかったので、もっとレベルの高いところで野球をしたいと思っていたときの3年生夏に観た甲子園。星稜高校と箕島高校の延長18回の熱戦。箕島は公立なので大阪から入れないのですが、星稜は私立なので入学できます。そこで「俺は星稜いく！」ときめ、中3冬に母を連れ金沢にむかいました。

アポイントもとっていないのでどこに何があるかまったくわかりません。たまたま通りがかった先生に事情を話すと、学校の隅々まで案内してくれて、野球部部長も紹介してくれ、練習もみせてもらえました。下宿先も紹介してもらえ見にいってみると、元中日ドラゴンズ小松辰雄投手がつかった部屋が空いているからここ使いなさい、合格したら使えるようにこの部屋あけておくからね！とトントン拍子に話が進んで頭のなかはすでに星稜野球部。ウキウキして大阪にかえると父親に大反対されました。反対の理由は私の野球レベル。体育会でキャプテンをしていた父から見たら種目はちがえど頑張ってなんとかなるレベルかどうかは見抜いていました。厳しい父でしたがやりたいことは自由にさせてくれていたので、その父がここまで反対するのはよっぽどのことなのかもしれないと感じ、大阪の公立高校の体育科に進みました。そこで自分の実力を思いしらされたのです。次元が違いすぎました。2学年上が甲子園にでているのですが、1年生で部員が100名いて、2学年下にはタイガースの矢野監督がはいってきました。これが星稜だったら全国から猛者が集まってきてもっと過酷な状況。父が反対した意味がここでようやく理解できました。

甲子園にでる夢は叶わなかったので、野球部監督として甲子園を目指そう！と思い体育教師をめざすことにしました。そこで大学も体育学部に進学をしたのですが、四年生のときに父が急に「会社を手伝わないか？」と言ってきたのです。好きな仕事をしたらよいからと会社を継ぐよう言われたこともない